



シンプルだからこそ奥が深いのが陸上競技

東京2020オリンピックの走り幅跳びで6位入賞を果たした橋岡選手。中学校で陸上部に入り、高校から本格的に走り幅跳びを始めました。橋岡選手が急速に成長した背景には、楽しんで競技をしていること、コーチやチームメイトなどに恵まれた練習環境にもありますが、目標に向かって日々の練習に主体的に取り組み橋岡選手は、ただ走っているだけ、ただ跳んでいるだけ、とても簡単に見えるまでも、一歩一歩の歩幅にも、とても細かい技術が詰まっています。陸上って奥が深い。それを追求していくのが



橋岡選手の最高記録は、8m36cm(教室の横幅なら軽く超えられる!)

スポーツは公平だから、誰にでも可能性が広がっている

橋岡優輝選手

陸上・走り幅跳び  
東京2020オリンピック6位入賞

楽しいですね。中でも、走り幅跳びの跳んでいる時間の気持ち良さに、僕はのめり込んでいきました。しかし、

スポーツに人種や国籍は関係ない

陸上競技の中でも走り幅跳びのよきな跳躍競技は、日本人には不向きだと言われていました。しかし、



「フェアプレイ宣言」しました!!

橋岡選手はそんな考え方を否定しています。「僕自身は、日本人だから無理だと思っただけで、一度もありません。スポーツに、人種や国籍は関係ありません。だから足が速い、〇〇人だから遠くまで跳べる。そういう考えを自分に向けなければ、可能性を殺してしまうし、また、相手に向けてしまうと、それは偏見や差別にもつながってしまうのではないのでしょうか。橋岡選手の言葉は、スポーツが公平であることの大切さを改めて感じさせてくれました。『有言実行』を信条とする橋岡選手は、3年後の目標もすでに声にし、新たな一歩を踏み出しています。「パリオリンピックは金メダルを取ります」。

ラスト1球のフェアプレー



卓球(丹羽孝希選手)

卓球では打った球が台の角に当たって入ることをエッジボールという。そしてこのエッジボールはほとんど打ち返すことができない。また、台に当たったかどうかを判定できることもある。

ドイツの選手が打った瞬間、球はアウトに見えたが、よし、日本の実況

一方で丹羽選手の振る舞いに感動の声が上がった。最後のポイントを認めたのかっこよかったなあ!

東京2020オリンピック卓球男子団体戦 勝った方が決勝に進める重要な試合

あと1点でドイツが勝利となる場面 日本8-10ドイツ

丹羽選手はすぐに台を指差した

この瞬間日本の敗退が決定した

試合後のインタビューで相当な悔しさをにじませていた

海外メディア> フェアに試合を進めればたとえ試合に敗れたとしても相手や観客たちからリスペクトを得ることになる

勝敗を決する瞬間でも不利になるジャッジを自ら申告した姿は

日本だけでなく海外にもフェアプレーの素晴らしさを印象つけた